

〈論文〉

中世房総における陶磁器の物流

鶴岡晃典

要約

本論文では中世関東の陶磁器、土器の概要、そして中世房総における陶磁器の物流を考察した。中世関東の陶磁器と土器は12世紀に「中世的な食器(土器)様式が完成」(浅野・服部1995)した。12世紀には東海産の製品が搬入されはじめ、また13世紀後葉から14世紀には北関東で在地の貯蔵具や調理具が生産されるが、南関東では生産されない(浅野・服部1995)。しかし、15世紀から「常陸と上総」などで在地の土器が出現する(浅野・服部1995)。このことから、東国でも北関東と南関東(特に東京湾)ではルートの違いから陶磁器、土器の様相が変わることが判明した。また関東に搬入された常滑窯製品と瀬戸窯製品は、関東では特殊器種(貿易陶磁器の模倣等)が多かった。しかし常滑窯は瀬戸窯の影響で甕や片口鉢などが主体に、瀬戸窯は古瀬戸後期から日常製品に変化することが挙げられる。また、常滑製品が15世紀から16世紀にかけて東国では減少するのに対して、千葉では増加することは特徴のひとつである。最後に中世房総における陶磁器・土器の流通では遺跡の性格と各窯の製品の分布から、地域ごと流通の特徴と主流経路について検討した。物流に関しては、流通品は鎌倉からの影響が見られるの、経路は従来から存在した鎌倉街道が中心にあったと推察する。

キーワード

房総 陶磁器 中世 物流 常滑焼 瀬戸焼

はじめに

本論文の目的は、中世の陶磁器と土器を活用し、中世房総^{註1}における陶磁器の流通を概観することである。このこと中世の流通経路が考えられ、陶磁器、土器の流通が房総のどこに何に比重があったのかが考察できると推察する。

陶磁器、土器の様相の研究は、関東では浅野晴樹氏と服部実喜氏が年代、器種ごとに概観されている(浅野・服部1995)。房総では小野正敏氏が房総で出土する陶磁器、土器の特徴を述べており(小野1991)、井上哲朗氏は出土量をグラフ化して房総内の特徴や変化について言及されている(井上

つるおか あきのり：淑徳大学 2018年度人文学部歴史学科卒業生 LIXIL ビバ勤務

2006)。また笹生衛氏は、年代ごとの変化を概観されている(笹生1991, 1998)。本論は上記の論文、関東の流通の研究、常滑製品など製品からみた地域ごとの変化の研究を参照した。その上で、房総で出土する陶磁器、土器の年代変化と流通経路の模索を目指した。

本論文は、浅野氏、服部氏、笹生氏の研究に導かれながら関東全体の陶磁器、土器の変化と房総での変化をまとめたものである。

先行研究によれば中世と古代との境目は「10世紀中葉」であり、「須恵器生産の衰退が顕在化する」変化によるものとされている(浅野・服部1995)。浅野氏と服部氏は須恵器から土師器等への変化が11世紀中葉を境に起こったと指摘する。例として11世紀後葉になると土師器のものは無くなり、土師質土器に統一され、「大小の皿」や「少量の有台椀、杯」を主体とする「器種構成が各地で普遍的になる」とされる(浅野・服部1995)。12世紀の関東は、常滑窯の貯蔵具が出土し、煮炊具は鉄製のものが主体になる。また食膳具に貿易陶磁器が定量を占めることから、12世紀の関東は「在地の手工業製品と遠隔地の特定器種」という構成が成り立ち、関東における「中世的な食器(土器)様式が完成」する時期とされる(浅野・服部1995)。12世紀末から13世紀中葉になると龍泉窯系青磁の比率の上昇、鎌倉以外における東海系諸窯の山茶椀や小皿の減少、在地土器が皿の形態のものだけになる(浅野・服部1995)。また、房総では12世紀中ごろ～13世紀前半は「貿易陶磁器は全体に量は少なく」、国産陶器は、「常滑と渥美が同量」とし、器種は「常滑窯の甕・捏鉢・三筋壺、渥美窯の甕・鉢・壺がある」とされる(笹生1998)。

13世紀後葉から15世紀中葉になると北関東は在地生産の片口鉢が存在するが、南関東では東海製品の使用がみられる(浅野・服部1995)。また房総では、13世紀中ごろから14世紀中ごろにかけて鎌倉の影響を受け、貿易陶磁器は「白磁から龍泉窯の青磁が主流」、国産陶器は「日常の貯蔵・調理用品は常滑窯の製品がほぼ独占」するようになった(笹生1998)。また、14世紀になると房総では「瀬戸窯製品が急激に増加する傾向」にあり、常滑窯製品は「大形の甕と捏鉢」の器種に限り、15世紀になると「甕だけに限定されていく」とされる(笹生1998)。

中世関東の陶磁器、土器の様相の特徴は北関東と南関東の在地土器の有無や東海産の製品の搬入量の差、また南関東は「中世全般にわたり恒常的に搬入品を入れることのできる流通機構が整備された地域」として考えられるという(浅野・服部1995)。

第1章 関東の陶磁器、土器における年代ごとの変化

この節では関東の陶磁器、土器における年代ごとの変化を浅野・服部1995の研究を参照し、関東の様相を概観する。各項は、食膳具(橋本氏の研究にあてはめるなら供膳具)、煮炊具、貯蔵具、調理具にわけてまとめた^{註2}。

2

1節 11世紀の様相

11世紀前葉の食膳具は、須恵器が衰退と消滅し、土師器や土師質土器が使用されるようになる。この変化は画一的ではなく、地域ごとの差がある。11世紀後葉になると土師器のものは無くなり、土師質土器に統一され、「大小の皿」や「少量の有台椀、杯」を主体とする「器種構成が各地で普遍的になる」とされる(浅野・服部1995)。

煮炊具は、11世紀前葉になると地域や遺跡ごとの「多様な器形や成形技法をもつ」土師器甕形土器が発生する。しかし、「出土量は全体的に減少する傾向」にある(浅野・服部1999)。11世紀後葉にな

ると煮炊具の「土師器甕型土器や羽釜など」は激減し、「一部の地域を除いて確認できなくなる」とされる。そして11世紀における貯蔵具の実態はつかめてはいないとされる(浅野・服部1995)。

浅野氏と服部氏はこのような変化が11世紀中葉を境に起こったと指摘する。この背景には「漆器や木器の食膳具をはじめ、木製貯蔵具、鉄製煮炊具など土器以外の」製品の普及があると指摘する(浅野・服部1995)。

2節 12世紀の様相

12世紀前葉の在地土器の様相は不明な点が多いが、食膳具は11世紀後葉の器種構成が継続された。また貯蔵具では茨城県に「保安三年(1122)および天治元年(1124)銘の銅製経筒」(浅野・服部199)が常滑窯三筋壺とともに出土していることから、この時期には東海系の諸窯の流通圏に入り、これらの製品も伝わり始めたとされる。煮炊具は主体が鉄製煮炊具になっている(浅野・服部1995)。

12世紀後葉になると、食膳具は白磁や龍泉窯の青磁製品などの貿易陶磁器が定量を占めるようになる。南関東では「東海系諸窯の山茶碗や小皿」が搬入される。在地土器は土師質土器のみになり、また漆器の使用も確認されている。またこの時期の貯蔵具と調理具も東海系の窯の製品が使用される。煮炊具は鉄製煮炊具と伊勢鍋系土師質土器がある(浅野・服部1995)。

関東にとってこのような12世紀の変化は、「在地の手工業製品と遠隔地の特定器種」という構成が成り立ち、関東における「中世的な食器(土器)様式が完成」(浅野・服部199)された時期とされる(浅野・服部1995)^{註3}。

3節 12世紀末から14世紀中葉の様相

ここでは、12世紀末葉から13世紀中葉と13世紀後葉から14世紀中葉とにわけてのべる。12世紀末葉から13世紀中葉の食膳器は12世紀後半の構成が継続される。この時期の特徴としては龍泉窯系青磁の比率の上昇、鎌倉以外における東海系諸窯の山茶碗や小皿の減少、在地土器が皿の形態のものだけになることが挙げられる(浅野・服部1995)。また調理具や貯蔵具も12世紀後半の構成が継続され、増加傾向にあり、宗教色の強い製品から日常容器の比率が高くなるとされる(浅野・服部1995)。他の特徴として、時代をまたぐが吉岡氏は12世紀後半から13世紀前半に東海系の諸窯が一円的に流通し、これに相即して在地土器生産が弱体化することを挙げている(吉岡1995)。そして「特に中世前半^{註4}の関東の最大の特徴は「中国陶器と常滑陶器に代表される広域流通品への依存度の高さ」であるとする(吉岡1995)^{註5}。

次に13世紀後葉から14世紀中葉の様相を概観する。この時期には北関東を中心に貯蔵具と調理具において新たな在地産土器が生産される。瓦質の壺と播鉢が生産され、壺は常滑焼の補完品として、播鉢は東播磨系の影響を受け生産されたとしている。しかし、南関東では瓦質の片口播鉢はほとんど見られず、この理由として「広域流通品の流通度が異なり」、北関東では「補完品への依存度が高かった」という(浅野・服部1995)。そして食膳具の土師器の皿はロクロの製品のみになる(浅野・服部1995)。

3

4節 14世紀後葉から15世紀中葉の様相

14世紀後葉になると在地の瓦質の壺製品は無くなる。また北関東では片口鉢は増産傾向にあるが、南関東では在地産の物は生産されない。また14世紀後葉以降になると古瀬戸様式の片口鉢が常滑窯の片口鉢に変わり「主体流通品」になる。そして14世紀後葉になるとの煮炊具は瓦質の鍋が生産される。土製煮炊具は中世前葉を通して東国全域で確認されていないが、この時期になると「関東甲信地方や東

海地方に土製煮炊具が出現」する。この背景には「鉄鍋生産の減少か鍋の需要の増大など」が想定される。この期間の食膳具は「古瀬戸の灰釉平碗、灰釉三足盤など、かなりの層の遺跡まで供給される」という(浅野・服部1995)。

5節 15世紀中葉から16世紀後葉の様相

この時期の特徴は常陸や上総でも在地土器が出現し、「在地土器生産の地域拡散と増産期」になる点である。調理具は在地の瓦質の片口鉢から土師質の播鉢に変化し、これは古瀬戸と常滑の片口鉢の変化に呼応する。煮炊具は北関東に瓦質の内耳鍋はあるが、南関東では在地の煮炊具は確認されない。食膳具は「古瀬戸系の碗・皿類」の他にも青磁や染付が存在する。これらは、前代同様に東京湾沿岸に位置する地域に多く搬入されるが、北関東では少なくなる(浅野・服部1995)。

これらのことから中世関東の陶磁器、土器の様相の特徴として、北関東と南関東の在地土器の有無や東海産の製品の搬入量の差が挙げられる。また南関東は鎌倉を失っても、「中世後葉においても求心力があり」、このことは「中世全般にわたり恒常的に搬入品を入れることのできる流通機構が整備された地域」として考えられている(浅野・服部1995)。

第2章 中世房総における陶磁器、土器の流通の分析

1節 房総の中世陶磁器・土器の流通

分析を行う前に房総の中世陶磁器・土器の様相の研究について述べる。ここでは笹生氏の研究成果(笹生1998)を参照し時代ごとに、国産陶器、貿易陶磁器、土器を中心に整理する。

1項 平安時代末期から鎌倉時代前半(12世紀中ごろ～13世紀前半)

この時代の「貿易陶磁器は全体に量は少なく」、「白磁の碗・皿は県内全体でも10例」しかない。理由としては「鎌倉の経済・流通の面で活発ではない」ことが挙げられるが、「白磁が比較的によくみられるのがこの時期の特徴」である。

それに対して国産陶器は、「常滑と渥美が同量」とし、器種は「常滑窯の甕・捏鉢・三筋壺、渥美窯の甕・鉢・壺がある」と指摘されている。カワラケは「11世紀ごろのロクロ土師器の特徴を色濃く残した形」となっている(笹生1998)。

2項 鎌倉時代中ごろから南北朝時代(13世紀中ごろ～14世紀中ごろ)

13世紀中ごろになると鎌倉が「経済・流通の要としての機能を果たすようになり、全国から多数の物資が流入するようになる」なる。貿易陶磁器は「白磁から龍泉窯の青磁が主流」となり、青磁の器種は「碗が圧倒的に多く」、白磁の器種は「小皿が主体」となった。国産陶器では「日常の貯蔵・調理用品は常滑窯の製品がほぼ独占」し「渥美のものは減少・消滅」する。この時期になると「瀬戸窯の製品が少量であるが出土するよう」になり、器種は「貿易陶磁器の四耳壺や梅瓶・水注・水滴を模倣したものと深皿」である。鎌倉の影響により「九州産の石鍋」と「伊勢鍋」とが輸入された(笹生1998)。

3項 室町時代前半(14世紀後半～15世紀中ごろ)

この時期になると「流通拠点である津(港町)宿(宿場町)」と「問丸」が出現した。貿易陶磁器は器種が減り、「青磁の無文の碗や、白磁の高台付き小皿などの限られた器種が中心」となる(笹生

1998)。

国産陶器は「瀬戸窯製品が急激に増加する傾向」にあり、「14世紀を境に、それまでの高級陶器の生産から」、「日常食器類」へと移行する。またこの製品は15世紀になると錆釉を行い、播鉢を生産し始める。常滑窯製品は「大形の甕と捏鉢」の器種に限る。しかし「15世紀になると独占していた鉢に、瀬戸窯製や地元産の播鉢が多く」なり、常滑製品は「甕だけに限定されていく」とされる(笹生1998)。

またこの時期は「鏝を付けた土製の鍋も多くみられるようになり」、これらは「伊勢鍋の系譜」を引くものだとされる。他にも「地元産の鍋や鉢が確認」され「比較的高い製品を地元で模倣して生産し安く売るといった流れの中で生まれてきた」とされる(笹生1998)。

4項 戦国時代(15世紀後半～16世紀後半)

この時期になると戦国大名により「それまでの流通経路」の「再編成が行」なわれた。貿易陶磁器は「白磁の小皿以外に染付が多くみられ」、青磁は「碗」、「稜花皿」、他に「唐草文様を内面に彫り込んだ白磁皿や」「褐釉小壺」などの「優品・珍品」が出土している。国産陶器は「瀬戸・美濃窯製品が皿・播鉢中心に多く供給」される。常滑窯製品は「大型の甕に限定され、16世紀には常滑窯自体の生産も衰退」した。16世紀後半には「瀬戸・美濃窯製品の模倣した」、「初山窯」と「志戸呂窯の製品」が関東に入るとされる。この動きは「北条氏(後北条)支配との関連性」があるとされる。内耳土鍋や播鉢(地元産)は「不明点が多いが、「依然として使われていた」と指摘している(笹生1998)。

2節 分析

1項 遺跡の概要

次に表にまとめた遺跡の概要を記す^{註6}。今回、遺跡数の合計は130で、分析対象になったのは109遺跡である(出土遺物数が分かるのは34遺跡)。地域ごとでの遺跡数は、安房が6遺跡、上総が44遺跡、下総が59遺跡をなり、下総がかなりの数を占める。全遺跡は図1となる。

2項 遺跡の性格

最初に遺跡の性格について述べる。今回、遺跡の種類は複合遺跡を含め21種になる。最も多いのは城跡^{註7}(複合の性格を合わせると41遺跡)で37遺跡、次に墓域が13遺跡、そして館が9遺跡と続く^{註8}。今回は城跡、墓域、館の特徴をまとめた。

最初に城跡についてまとめる。地域ごとでは、安房が2遺跡(1遺跡^{註9})、上総が15遺跡(6遺跡^{註10})、下総が20遺跡(4遺跡^{註11})、であった(図2)。出土遺物としては貿易陶磁器、国産陶磁器、在地土器(土器)の種類がまんべんなく出土している。陶磁器、土器の数量が分かる遺跡で貿易陶磁器、国産陶磁器、在地土器(土器)の各合計で比較すると、11遺跡中1遺跡だけ貿易陶磁器が多かった。しかし、その貿易陶磁器が多かった遺跡は6点しかなく、また全体的にも貿易陶磁器が少ない。また国産陶磁器と在地土器(土器)を比較すると各合計数が多い数は5遺跡同士で同じだが、全体の数量で見ると在地土器(土器)が多い。また在地土器(土器)の割合は、安房、上総だとカワラケが多いが、下総の篠本城跡と北ノ作遺跡では内耳土鍋や在地と思われる播鉢の割合の方が高くなっている。

これらのことから、中世房総の城跡では貿易陶磁器は少ない傾向がある。また地域によって国産陶磁器とカワラケの割合のどちらかが高くなる。そして在地土器(土器)の割合が8遺跡はカワラケが多いが、2遺跡だけ内耳土鍋が多い遺跡が存在する。内耳土鍋に関しては、下総で出土していることが浅野氏によって指摘されている(浅野1995)。

次に墓域について述べる(図3)。地域ごとに分けると安房はなく、上総は4遺跡、下総が8遺跡である。また今回は墓域の複合遺跡であるNO.17、NO.18、NO.29、NO.34、NO.50、NO.51、NO.54の遺跡を追加し、上総は9遺跡、下総は10遺跡、合計19遺跡で房総における墓域の分析を行う。分布としては千葉県の上総半島によっている(図5)^{註12}。出土陶磁器、土器でみると貿易陶磁器が種類、数において少ないといえる。貿易陶磁器が出土したのは19遺跡中9遺跡であるが、一つの遺跡あたりに出土する種類が多くても2種類である。龍泉窯系青磁碗が多く、その次に白磁四耳壺である。国産陶器は骨蔵器や甕棺のとして使用されている。総数は30点で常滑窯の製品が15点を占めている。型式ごとで分けると5から6型式(13世紀初から14世紀)が8点で多く、次に2型式から3型式(12世紀から末)が2点と続く。浅野氏は13世紀から14世紀は関東において常滑窯の「壺などが骨蔵器として大量に搬入された」(浅野1995b)と指摘する。今回の分析でも2型式から3型式が2点、5型式から6型式8点と増加しており浅野氏の指摘は房総でも当てはまる。

最後に館について述べる(図4)。最初に地域ごとに分けると安房に1遺跡、上総が2遺跡、下総が6遺跡(3遺跡^{註13})であった。城郭と同様に貿易陶磁器、国産陶器、在地土器(土器)の合計を比較すると貿易陶磁器が減少している。城跡と異なる点としては、国産陶器と在地土器では、国産陶器が多いことが指摘できる。在地土器に括目すると城跡NO.104、NO.108と同様に、内耳土鍋が多いNO.73がある。このことから下総において在地内耳土鍋における流通範囲が形成されていたと推測できる。

以上、3つの遺跡の種類について述べた。城跡、館跡から房総では国産陶器にくらべ貿易陶磁器が少ないこと、内耳土鍋は遺跡の性格にかかわらず、ある一定の範囲で流通が存在すること、骨蔵器から14世紀における常滑窯製品の増加が挙げられる。次の節では都市鎌倉の存在の影響と、房総で出土する陶磁器を取りあげ、搬入経路について考察したい。

3節 分析：中世房総の陶磁器分布による流通の分析

前述したように、都市鎌倉の存在の影響と出土した陶磁器と土器から、中世における房総の陶磁器、土器を分析し搬入経路について考察する。

1項 房総と鎌倉の近さ

ここでは、房総と鎌倉との近さについて概観する。とり挙げる理由は鎌倉と房総の距離的近さによって、鎌倉から房総への影響を考えるからである。鎌倉と房総の近さとしては、鎌倉の湊の六浦と房総の湊の古戸との距離的な近さがある。また時代がさかのぼるが「771年(宝亀2)に武蔵の所轄が東山道に変更」(川尻2007)なる前は、相模国と上総国は「走水(浦賀海道)」(川尻2007)で東海道の本道を結んでいたことから、駅路としての近さを指摘できる^{註14}。そして吉岡氏によると鎌倉は「求心流通機能を担っていた」(吉岡1995)としているため、経済的近さも影響したと考える。このように鎌倉と房総は多くの点で「近さ」を念頭に置く必要がある。この点を含めた房総と鎌倉の関係性について、宗臺富貴子氏の研究を参考に分析していきたい。

2項 参考研究について

ここでは宗臺氏の論考(宗臺2007)について概観する。

宗臺氏は2種類の陶磁器を分析対象としている。一つは「受容者の社会的階層を表示」する「舶載と瀬戸窯の四耳壺・瓶子・水柱」^{註15}、もう一方は鎌倉遺跡郡内における日常生活用の製品で「青磁鎚蓮弁碗(大宰府I-5b)と白磁口兀碗・皿(太宰府白磁碗・皿IX類)」である(宗臺2007)。宗臺氏はこれ

らの流通経路や分布の広さの違いを分析する。対象の地域は神奈川県、千葉県、東京都、埼玉県である。千葉県は、28遺跡が該当し、両方出土しているのは17.9%、貿易陶磁器は39.3%、瀬戸窯製品だけは42.8%とした(宗臺2007)。分布図をみると両方とも東京湾の近くに分布し、鎌倉街道付近またはその上に分布することがわかる。この研究の全体から宗臺氏は双方の陶磁器が出土する遺跡は「鎌倉幕府との強い繋がり」がある「御家人」や「在地有力者の館」や寺院に分布する例が目立つと指摘する(宗臺2004)。また、「大型の壺・瓶類は居住者の階層差を明示する製品」であることや青磁鎚蓮弁碗と白磁口兀碗・皿、そして瀬戸製品の互いの流通経路が結びついているとのべる(宗臺2007)。

3項 分析方法

前述した宗臺氏の研究を基に筆者が集めた資料でも同様なことがいえるのか分析していきたい。今回は宗臺氏と同様な対象とともに古瀬戸は大窯期まで、そして常滑製品の捏鉢を加えて分析する。加えた理由として宗臺氏の分析(鎌倉との繋がりと影響)だけではなく、房総における全体的な陶磁器の流通の形を掴みたいからである。浅野氏によると「鎌倉成立以前における常滑や渥美の搬入の実態を明らかにする」方法として、「経塚資料以外に城館跡や寺院・集落などの生活遺跡における初期常滑などの資料蓄積が必要」としている(浅野1995a)。この浅野氏の指摘を踏まえ、今回は常滑製品の捏鉢を用いた。また前述したように14世紀後葉以降になると古瀬戸様式の片口鉢が常滑窯の片口鉢に変わり「主体流通品」(浅野・服部1995)になることから、古瀬戸後期様式以降の片口鉢についても分析する。

1目 貿易陶磁器の分布の分析(図5)(図6)

最初に貿易陶磁の分布について考察したい。筆者が作成した図では、蓮弁文碗B群と花瓶、瓶、壺、茶壺、水滴を追加した(図5)。まず分布を見てみると宗臺氏と同様に東京湾沿いあるいは鎌倉街道上に分布する。また図6では遺跡NO.32、NO.45が太平洋側に出土し、遺跡NO.32は鎌倉の寺社と関係がある地域、遺跡NO.45は鎌倉と強い繋がりがある領主層の遺跡である。二つの分布図をみると鎌倉政権との関わりよりも、鎌倉街道上の遺跡に分布しているよう点が見取れる。二つの分布図が重なりあった遺跡はNO.19、NO.15、NO.9、NO.45であり、NO.15とNO.45が鎌倉と関係がある遺跡である。

2目 「社会的階層を表示」する瀬戸製品の分布(宗臺2007)(図7)

次に「社会的階層を表示」(宗臺2007)する瀬戸製品の分布を分析する。分布の対象は図2の対象器種も合わせて分析する。古瀬戸窯前期、中期の製品の分布は器種を増やしたことにより多少差がみられるものの、宗臺氏の分布とはほぼ同じといえよう。同じ器種である貿易陶磁器とのかさなりはNO.40、NO.89、NO.109で見られる。NO.40は東京湾と太平洋をつなぐ交通の要地の遺跡(城跡か寺院跡)、NO.89は墓域であり造営者は香取神宮の神官か神宮内の上層農民かである。そしてNO.109は城(館)跡である。これらの分布より、鎌倉との結びついていた可能性は推測できるが、筆者は鎌倉街道の経路上に落ちていることから、房総では主要な流通経路に分布しただけではないかとも考える。次に常滑窯捏鉢(片口鉢)と古瀬戸窯の片口鉢の分布を分析する。

3目 常滑窯捏鉢(片口鉢)(図8)と古瀬戸窯(図9)の片口鉢の分布の分析

ここでは常滑窯片口鉢の分析を行う。常滑窯だけではなく生産地が近い渥美窯の製品も分布を見てみたい。まず1190年以前の分布は、4箇所あるがNO.5以外は1型式から4型式となるため、4型式の

可能性がある。NO.5では3型式のものが分布している。次に常滑製品の搬入がピークになる12世紀から13世紀末までを分析する。分布の中心は東京湾沿いに分布し、東側は少なく、また下総でも少ないことが分かる。また鎌倉街道上にも分布するが北東部は1箇所しか分布しない。次に古瀬戸窯以降の片口鉢の分布を分析する(図9)。分布図をみると千葉県全体に分布する。古瀬戸後期様式の分布は全体的であるが、大窯期になると分布が西部に集中するが、図8とは異なり北西部まで分布が広がっている。

4節 中世房総における陶磁器流通の一考察

ここまでの分析からこの節では中世房総における陶磁器流通を考察する。図7から図11までの分布図から、鎌倉街道(図10)と呼ばれる経路上に陶磁器の主流があったと考える。

また分布図から1つの主流となる流通経路を考えた(図11の➡)。筆者指摘する鎌倉街道を主流として北上する流通経路である。このルートはこの街道を北上しながら、千葉県中部で分岐すると考える。

しかし、このルートだけでは外れてしまう遺跡がある。まず、図8から図10で分布する遺跡NO.5である。この遺跡については河川での運搬と考えたい。なぜなら、滝川氏による戦国期の房総太平洋岸の研究によれば、房総半島最南端の野島崎沖は難所(現在も)であると指摘されており、海路による運搬は考えにくいからである(滝川1997)^{註16註17}。

次に図9の北西部の遺跡NO.53、NO.109である。これらは品河湊から廻ってきたものとする。綿貫友子氏の研究によると品河湊は「品河湊船帳」に伊勢からきたであろう舟の名があることから、中世には東海製品が来ていることが判明している(綿貫1989)。このことから、NO.53、NO.109に陶磁器の形式が古いものが出るのではと考える。このことから千葉県北西部からも陶磁器が流入するルートがあったと推察できる。

これらのことから、主流となる千葉県南東部の流通と品川湊からの流通ルートが、千葉県中部で合わさり、千葉県東部の方に流れると推察する(図11の➡)。これらは陶磁器の重さと流通の効率さから河川、海、陸上交通を複合していると考えられる。

おわりに

本論文では、中世の関東と房総の陶磁器、土器の研究を概観、宗臺氏の研究を参考し分析を行った。今回の分析では3種類の遺跡の性格を最初に分析した。城跡では貿易陶磁器は少ない傾向があり、地域によって国産陶磁器とカワラケの割合がどちらかが高くなる。墓域は貿易陶磁器が多くて2種類のことや浅野氏の指摘(浅野1995b)が当てはまることが分かる。館は城跡と異なる点として国産陶器と在地土器では、国産陶器が多いことが挙げられる。また下総において在地内耳土鍋における流通範囲が形成されることが想定されるが本論文では追及することが出来なかった。

8

次に各出土陶磁器、土器の分布について房総と鎌倉の距離的近さを踏まえて分析した。ここでは鎌倉と関連がある遺跡が目立つと想定されたが、主要流通経路におちているともみてとれる。このことから常滑窯の捏鉢と瀬戸窯の片口鉢の分布の分析を行い、そして流通経路を模索した。流通ルートについては、主流となる千葉県南東部の流通と品川湊からの流通ルートが、千葉県中部で合わさり、千葉県東部の方に流れると推察する(図11の➡)。これらは陶磁器の重さと流通の効率さから河川、海、陸上交通を複合していると考えられる。

この後の課題についてまとめたい。本論文の課題は多く、房総における貿易陶磁器、在地土器との関係、各地域ごとの流通、遺跡の性格による差異、そして具体的な流通の模索が足りないとする。

地土器に関しては在地の播鉢と内耳土鍋の分布は作成した(図12)(図13)。流通圏としては、「旧国で一・二国単位もしくは半国単位のほどの地域」と浅野氏は述べる(浅野2003)。

流通経路に関して鎌倉街道に分布がおちるとしたが、街道だから良いのではないとも考える。例えば遺跡NO.15は墓域、道路、集落の性格を持ち、鎌倉街道が通る。そこには柴田龍司によると「[市]的な場を想定することができる」としている(柴田龍司1998)。また、物流は「決して一元的ではない」^{註18}と浅野氏は指摘する(浅野1997)。他にも「求心力の違いが物の分布に反映されてくる」(浅野1997)とも述べている。これらのことから鎌倉街道にあった市や求心力を持つ人によって分布がおち、また流通経路は多元的な重なりがあると考える。また今回はこれらのことが分析、考察できなかったことや流通というところまで考察できたかは不明であり、今後の課題としたい。今回の卒業論文の製作にあたり、淑徳大学三宅俊彦教授、淑徳大学30年度三宅ゼミ生には多くのご指摘、ご指導を賜った。ここで深く感謝をさせて頂く。

参考文献

- 赤羽一郎氏 1995 「中世常滑焼とは何か」永原慶二編『常滑と中世社会』小学館
- 浅野晴樹 1995a 「東国の常滑焼の出土状況」永原慶二編『常滑と中世社会』小学館
- 1995b 「陶磁器からみた物流」峰岸純夫、村井章介編『中世東国の物流と都市』山川出版
- 1997 「土器からみた中世の東国」網野良彦・石井進・鈴木稔編『中世日本列島の地域性—考古学と中世史研究6—』
- 2003 「東国における在地土器の生産と流通」小野正敏・萩原三雄『戦国時代の考古学』高志書院
- 浅野晴樹・服部実喜 1995 「各地の土器様相 3. 関東」中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 安藤孝一 1987a 「瀬戸焼」国史大事典編集委員会『国史大事典』8巻 吉川弘文館
- 1987b 「青磁」国史大事典編集委員会『国史大事典』8巻 吉川弘文館
- 井上哲朗 2006 「中世房総における陶磁器類の流通・消費動向」千葉文化財センター『千葉文化財文化センター研究紀要24—30周年記念論集—』千葉文化財センター
- 永竹威 1987 「染付」国史大事典編集委員会『国史大事典』8巻 吉川弘文館
- 小野正敏 1991 「房総の城館出土中世陶磁器の問題」千葉歴史学会『千葉史学』第18号
- 金沢陽 2007 「龍泉窯」小野正敏 他多数『歴史考古学辞典』吉川弘文館
- 木本雅康 1987 「東海道」国史大事典編集委員会『国史大事典』8巻 吉川弘文館
- 齋藤善之 1995 「中・近世海運と房総沖航路」永原慶二編『常滑と中世社会』小学館
- 笹生衛 1991 「房総の中世土器の様相について」史館同人編『史館23』史館同人編
- 1998 「中世の焼き物(年代推定の基準)」千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史資料編 中世1 考古資料』千葉県
- 柴田龍司 1998 「23 山谷遺跡」千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史資料編 中世1 考古資料』千葉県
- 宗臺富貴子 2007 「南関東の陶磁器流通」浅野晴樹・齋藤慎一『中世東国の世界2 南関東』高志書院
- 滝川恒昭 1997 「戦国期における房総太平洋岸における湊・都市の研究—房総沖太平洋海運検討の前提として—」千葉歴史学会『千葉史学』第31号
- 千葉県史料研究財団編 1998 『千葉県の歴史資料編 中世1 考古資料』千葉県
- 村井章介 1995 「問題提起」峰岸純夫、村井章介編『中世東国の物流と都市』山川出版
- 橋本久和 1995 「中世社会と土器研究」中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 藤澤良祐 1995 「中世陶器(古瀬戸)」中世土器研究会『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 藤澤良祐 2003 「瀬戸・美濃大窯の生産と流通」小野正敏・萩原三雄『戦国時代の考古学』高志書院
- 宮瀧交二 1995 「中世東国における陶磁器の流通と海上・河川交通」峰岸純夫、村井章介編『中世東国の

物流と都市』山川出版

- 山本信夫 1995 「貿易陶磁器 中世前期の貿易陶磁器」中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 吉岡康暢 1997 「新しい交易体系の成立」『考古学による日本歴史9 交易と交通』雄閣山出版
- 1995 「東国の都市と物流をめぐって」峰岸純夫、村井章介編『中世東国の物流と都市』山川出版
- 綿貫友子 1989 「「武蔵国品河湊船帳」をめぐって—中世関東における隔地間取引の側面—」日本女子大学史学会『史艸』30号、後、綿貫友子『中世東国の太平洋海運』東京大学出版会に採録。

註釈

- 註1 論題にも房総とあるが、本論文における房総の範囲は現在における行政区分の千葉県とする。
- 註2 浅野・服部 1995 は時代を8期まで区分している。1期は11世紀前葉、2期は11世紀後葉、3期は12世紀前葉、4期は12世紀後葉、5期は12世紀末葉から13世紀中葉、6期は13世紀後葉から14世紀中葉、7期は14世紀後葉から15世紀中葉、8期は15世紀中葉から16世紀後葉である。
- 註3 浅野氏によると「九～十世紀段階において、すでに大量の東海諸窯の灰釉陶器が海路・陸路で東国社会にももたらされていた事実」があるとしている(浅野 1995a)
- 註4 吉岡氏の時代区分は、Ⅰ期中世初期(11世紀後半～12世紀前半)、Ⅱ期中世前期(12世紀中葉～13世紀前半)、Ⅲ期中期(13世紀後半～14世紀前半)、Ⅳ期後期(14後期～15世紀中葉)、Ⅴ期末期(15世紀後葉～16世紀末)である。またⅠからⅢ期を中世前半、Ⅳ期とⅤ期を中世後半と大別できるとしている(吉岡 1995)。
- 註5 吉岡氏は他にも中世東国の陶磁器流通の特徴として2つの点を挙げている。1つ目に12世紀中葉から13世紀前半の「鎌倉における土師器皿、および」13世紀後半から14世紀前半「の京都・博多より高密度かと思われる中国陶磁の大量消費」、また「西国産食器の搬入と周辺への拡散」すること。2つ目に「中世Ⅳ期(前半)にみる中国陶磁器流通の減少と瀬戸陶器の流入、Ⅴ期における城主層における中国陶磁の集中的所有」することを指摘している。
- 註6 今回、中世房総の遺跡の分析を行う上で、表1房総半島の中世遺跡を作成した。表の対象の遺跡は千葉県 1998『千葉県の歴史 資料編中世1 考古資料』と井上哲朗 2006「中世房総における陶磁器類の流通・消費動向」の中の陶磁器、土器が出土する遺跡を抽出した。また今回は表の字数の多さから、表1は本論文用に簡略させて頂いた。
- 註7 城郭の性格(機能)は笹生氏によると「普段の生活に重点を置いている遺跡は「館」、「防御性を重視している遺跡は「城」、「館や城や砦・陣屋など合わせて「城館」としている(笹生 1998)。本論では、このことを参考にしつつも報告者によって遺跡の性格の決定がことなっていたため、生活の活用のあるものを「館跡」、両方の性格を含むものは「城館」、それ以外を城跡とした。
- 10 註8 その他には経塚3遺跡、屋敷(館)8遺跡、墓域と寺跡5遺跡等がある。
- 註9 カッコ内は陶磁器、土器の出土数量が判明している遺跡の数を示した。この地域では、番号4岡本城跡である。
- 註10 前註と同様。この地域ではNO.16久保田城跡、NO.22 笹子城跡、NO.31 金谷城跡、NO.38 飯櫃城跡、NO.44 一宮城跡、NO.47 大多喜城跡である。
- 註11 前註と同様。この地域では、NO.57 根戸城跡、NO.103 鎌木城跡、NO.104 篠本城跡、NO.108 北ノ作遺跡である。
- 註12 骨蔵器が出土した他の複合遺跡も追加した。
- 註13 数量が分かる遺跡はNO.65 南屋敷遺跡、NO.73 池ノ尻遺跡、NO.86 駒井西ノ遺跡・荒迫遺跡である。

註14 今回の東海道の範囲は古代である。武蔵国が東海道に入る前までは、走水から安房国へ、そして上総国に入る駅路の経路であった。しかし、武蔵国が入ると下総国から上総への分岐する経路が使われるようになった(木本1987)。

註15 瀬戸窯製品は古瀬戸前期から中期までである(宗臺2007)

註16 滝川氏は「白浜・勝浦・一宮などは港湾都市として評価できる」とするが、これらの場所が「自然災害によって大きくその地形を変えている」とする(滝川1997)。

註17 齋藤氏は廻船業を行った盛田家の船の動きから野島崎沖は超えていたとするが、今回は論述することは控える(齋藤1995)。

註18 「内陸の物流のあり方は多岐に」わたり、「一元的な輸送集団のみ考える必要はない」ともしている(浅野1995b)。

表1 房総半島の中世遺跡

番号	地域	遺跡名	番号	地域	遺跡名
1(3)	安房	萱野遺跡	56(74)	下総	鹿島前遺跡
2(4)	安房	館山城跡	57(75)	下総	根戸遺跡
3(6)	安房	下ノ坊遺跡B地点	58(76)	下総	中峠城跡
4(7)	安房	岡本城跡	59(77)	下総	箕輪城跡
5(9)	安房	西郷氏館跡	60(78)	下総	廿五里城跡
6(11)	安房	旭森経塚	61(79)	下総	西屋敷遺跡
7(13)	上総	台遺跡	62(80)	下総	千葉寺経塚
8(14)	上総	草刈六之台遺跡	63(81)	下総	浜野山遺跡群(浜野川神門遺跡)
9(15)	上総	市原条理制遺跡	64(82)	下総	千葉城跡(猪鼻城跡)新田遺跡
10(16)	上総	権津城跡	65(83)	下総	南屋敷遺跡
11(19)	上総	分目要害遺跡	66(84)	下総	城山城跡
12(20)	上総	神田遺跡・神田古墳群	67(85)	下総	高品城跡
13(21)	上総	荒久遺跡	68(86)	下総	生実城跡
14(22)	上総	文脇遺跡	69(87)	下総	大谷城跡
15(23)	上総	山谷遺跡	70(88)	下総	土気城跡
16(24)	上総	久保田城跡	71(89)	下総	井戸向遺跡
17(26)	上総	天神前遺跡	72(90)	下総	長岡堂庭遺跡
18(27)	上総	鳥越古墳火葬墓	73(91)	下総	池ノ尻館跡
19(28)	上総	菅生遺跡	74(92)	下総	戸崎館跡
20(29)	上総	芝野遺跡	75(93)	下総	和良比堀込城跡
21(30)	上総	真里谷城跡	76(94)	下総	高岡大福寺遺跡
22(31)	上総	笹子城跡	77(95)	下総	間野台・古屋敷遺跡
23(32)	上総	外真輪遺跡・八幡神社古墳	78(96)	下総	石川館跡
24(33)	上総	泉遺跡	79(97)	下総	白井城
25(34)	上総	郡遺跡	80(99)	下総	本佐倉城跡
26(35)	上総	蔵玉砦跡	81(100)	下総	本佐倉大堀遺跡
27(36)	上総	千本城曲輪遺跡	82(101)	下総	本佐倉長堀寺脇館跡
28(37)	上総	狐塚遺跡	83(102)	下総	打手第二遺跡
29(39)	上総	上北原古墳	84(103)	下総	大塚塚群
30(40)	上総	佐貫城跡	85(104)	下総	小林城跡
31(43)	上総	金谷城跡	86(106)	下総	駒井野西ノ下遺跡・荒追遺跡
32(44)	上総	久我台遺跡	87(107)	下総	東和田城跡
33(45)	上総	東金城跡	88(108)	下総	天王船塚11号墳経塚
34(46)	上総	道塚やぐら群	89(109)	下総	吉原三王遺跡
35(48)	上総	埴谷周路遺跡	90(110)	下総	仁井宿東遺跡
36(49)	上総	山室城跡	91(111)	下総	網原屋敷跡遺跡
37(50)	上総	坂田城跡	92(112)	下総	山崎城跡
38(51)	上総	飯櫃城跡	93(113)	下総	鷗崎城跡
39(52)	上総	田向城跡	94(114)	下総	伝平良文館跡
40(53)	上総	笹遺跡群(神田山頂II・III遺跡)	95(115)	下総	大六天遺跡
41(54)	上総	小林西之前遺跡	96(116)	下総	森山城跡
42(55)	上総	新小幡遺跡	97(119)	下総	助崎城跡
43(56)	上総	本納城跡	98(120)	下総	大慈恩寺遺跡
44(58)	上総	一宮城跡	99(121)	下総	久井崎城跡
45(59)	上総	岩川館遺跡	100(122)	下総	松子城跡
46(61)	上総	長南城跡	101(123)	下総	南敷城跡
47(62)	上総	大多喜城跡	102(124)	下総	馬洗城遺跡
48(63)	上総	大野城跡	103(127)	下総	鑄木城跡
49(64)	上総	万喜城跡	104(128)	下総	篠本城跡
50(65)	上総	上総法興寺跡(岩熊慶寺)	105(12)	下総	郡本遺跡郡
51(68)	下総	下総国分寺跡	106(66)	下総	中滝城跡
52(69)	下総	中山法華経寺祖師堂跡	107(105)	下総	船尾城跡
53(71)	下総	万福寺境内遺跡・根郷貝塚	108(なし)	下総	北ノ作遺跡
54(72)	下総	三輪野山遺跡群(三輪山道六神遺跡B地点)	109(なし)	下総	中馬遺跡
55(73)	下総	小金城跡			

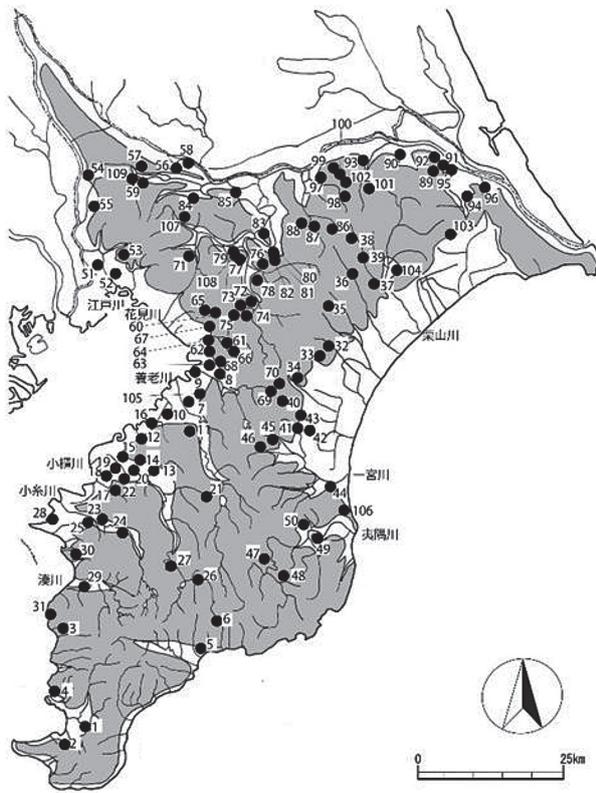


図1 千葉県内陶磁器、土器が出土する中世遺跡

・本表の対象遺跡は以下の参考文献を活用した。
 ・番号の()は『千葉県の歴史』の遺跡の番号である。

参考文献

- 井上哲朗 1998「鹿島流域における戦国前期城館の一形態—四街道市北ノ作遺跡の調査から—」千葉文化財センター『研究連絡誌』第53号千葉文化財センター
- 井上哲朗2006「中世房総における陶磁器類の流通・消費動向」千葉文化財センター『千葉文化財センター研究紀要24—30周年記念論集—』千葉文化財センター
- 柏市遺跡調査会1999『柏市埋蔵文化財調査報告書38 中馬場遺跡(第4次)』柏市教育委員会
- 千葉県史料研究財団1998『千葉県の歴史 資料編中世1 考古資料』千葉県
- 築瀬裕一2006「一宮城跡出土の陶磁器について」千葉城郭研究会『千葉城郭研究』第8号
- 築瀬裕一2012「東国における戦国期城館と出土遺物の年代観」『中世房総と東国社会 中世東国論4』

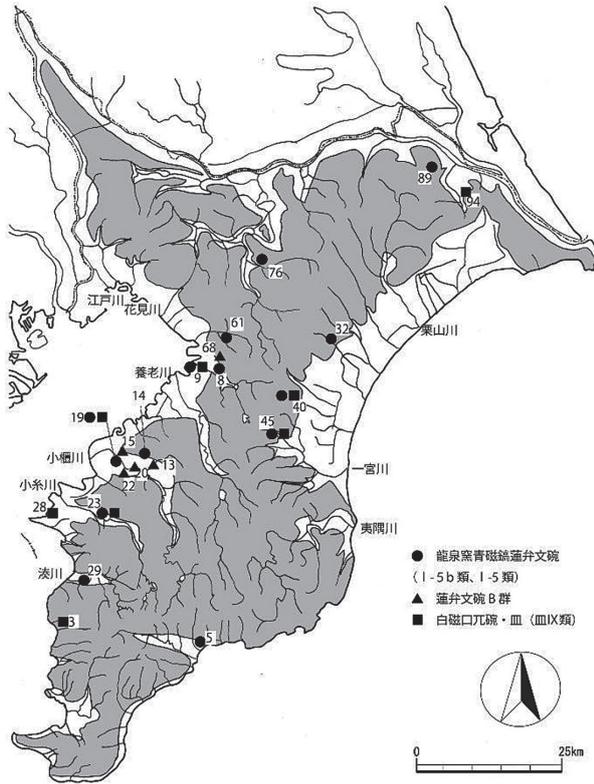


図6 鎌倉遺跡の日常当時(貿易陶磁器)

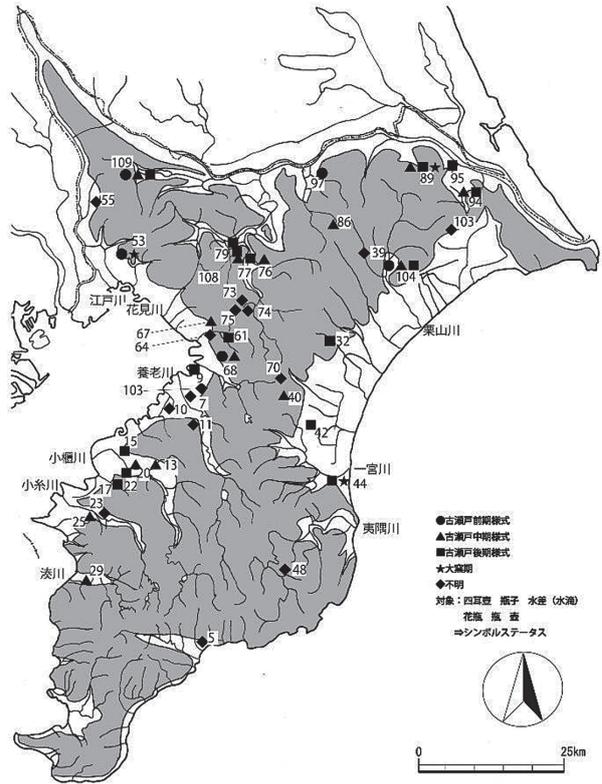


図7 社会的階層を表す国産陶器

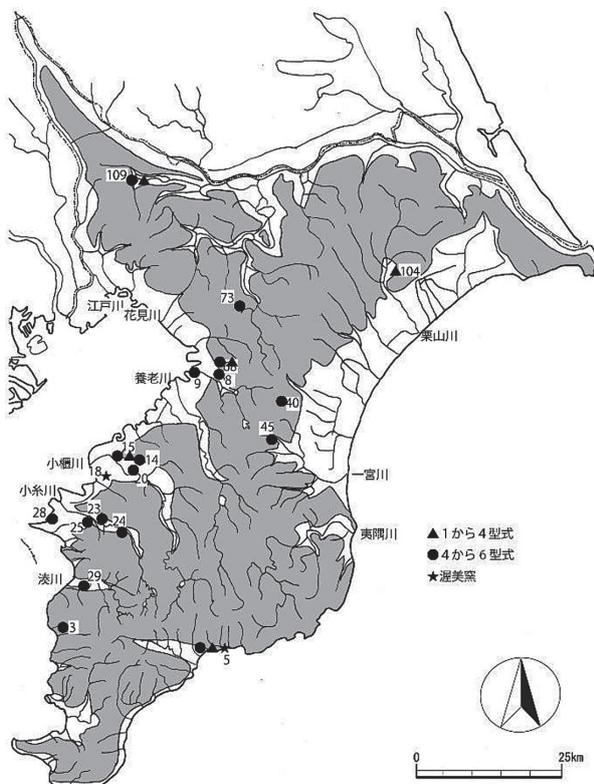


図8 常滑窯片口鉢

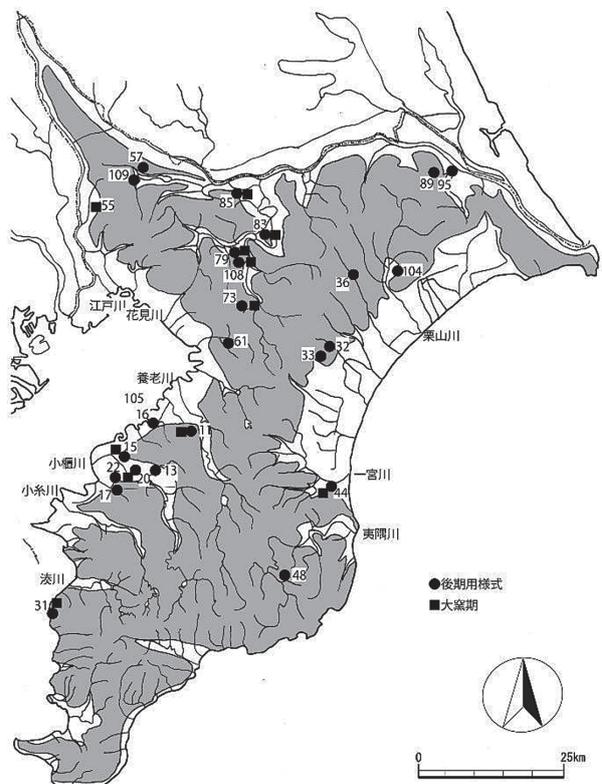


図9 瀬戸窯片口鉢

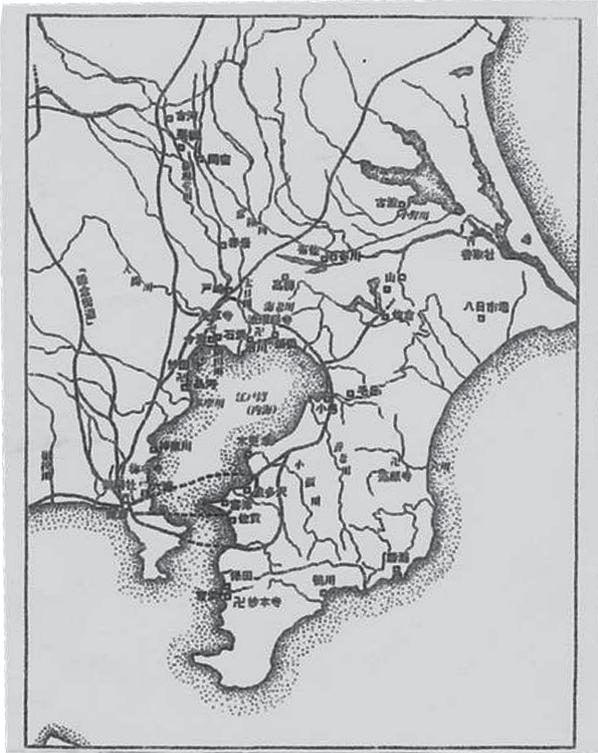


図10 中世関東の交通路(鎌倉街道)と河川路
 村井章介1995「問題提起」峰岸純夫、村井章介編『中世東国の物流と都市』山川出版より

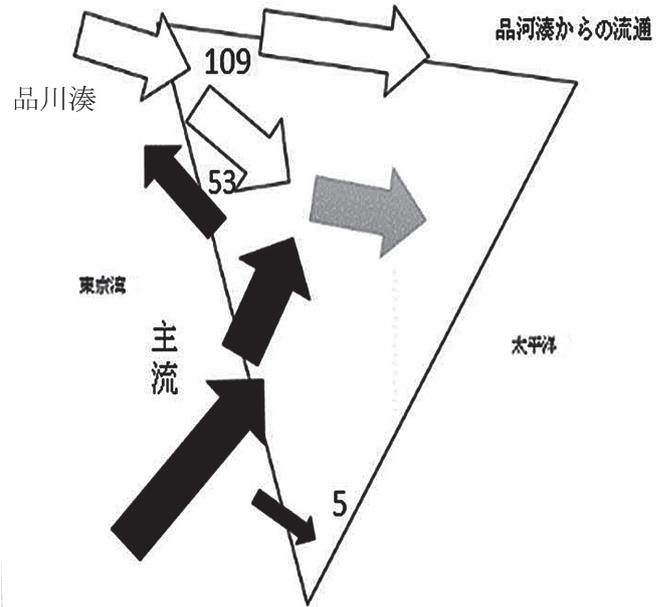


図11 推定経路

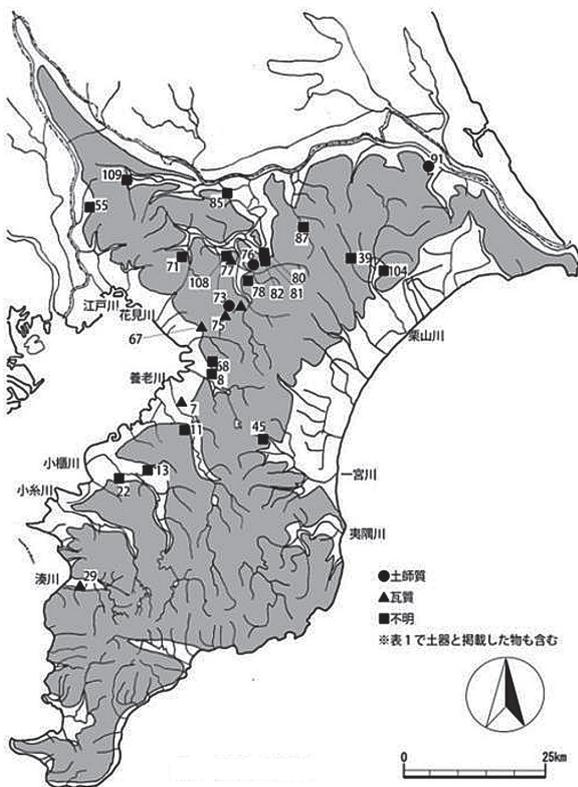


図12 千葉県内の所在地掘鉢

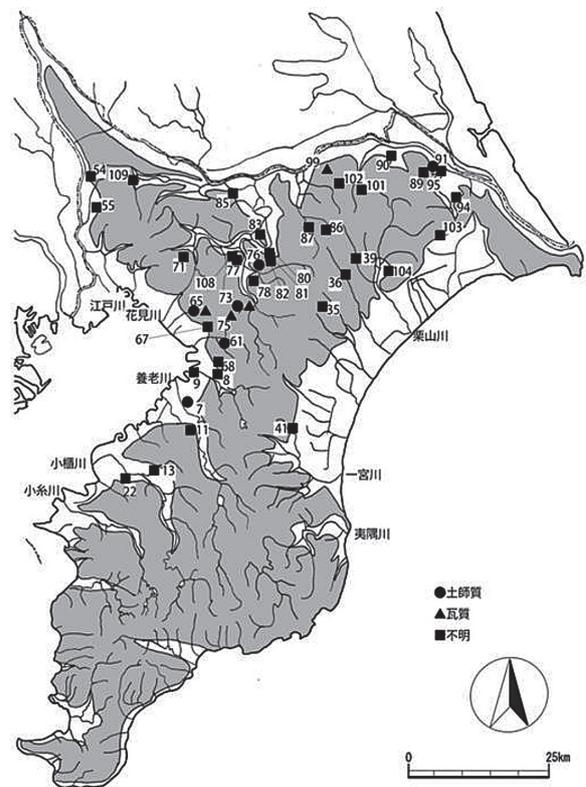


図13 千葉県内の内耳土鍋